

Femtech(フェムテック) (1)

はじめに

今回のテーマはFemtechです。この聞きなれない言葉Femtech(フェムテック)とは、Female(女性)とTechnology(テクノロジー)を掛け合わせて新しく作られた造語です。Femtechとは、人生の長期間にわたって女性ホルモンの影響を受けることにより生ずる、男性とは異なる女性特有の健康問題を新しいテクノロジーで解決する商品(製品)やサービスのことで、世界中でFemtech関連のスタートアップ(*注1)が立ち上がっています。

海外のスタートアップをみると生理痛の改善や月経周期の予測(月経のトラッキング)、妊娠中のQOLの向上、不妊症対策、更年期障害の改善、セクシャルヘルスなど女性特有の病気などのケアが取り組まれています。日本でも月経周期の予測、妊娠をサポートするアプリ「ルナルナ」はよく知られており、これはフェムテックのサービスアプリです。一方で、デジタルテクノロジーではない製品は「フェムケア」と呼ばれています。

アメリカのリサーチファーム「Frost & Sullivan」の2018年の調査によると、Femtechは2025年までに5兆円規模の世界市場になると予測されており、注目の分野であると言えます。



フェムテック市場に参入したGU

(*注1)スタートアップ

日本では新しく誕生して、小規模で威勢のよい会社をベンチャー企業と呼んでいます。Venture CapitalやVenture-backed companyという表現はありますが、そもそも「ベンチャー企業」という単語は日本人が作った和製英語です。日本のベンチャー企業は「新たに立ち上がったスモールビジネス」で、新しい技術や知識を軸に、大企業では実施しにくい小回りの効く経営や、思い切った決断をする中小企業と考えてよいでしょう。

スタートアップとベンチャーとを隔てるものは、その企業が設定している「ゴール」です。ベンチャー企業は中長期的に課題に取り組み、世の中の課題を解決しようとするが、スタートアップは主に短期間のEXIT(エグジット)を目的としています。

ベンチャー企業は、市場においてある程度受け入れられると予測が得られた事業を、既存のビジネスモデルベースに展開し、安定した収益と長期成長を目指すもので、長期的な成長を目標にバランスの取れた組織とスタッフの成長や無理のない社内プロセスを築いていこうとします。

一方、スタートアップには「イノベーション」が存在します。起業家はそのイノベーションを通じて、人々の生活や社会を変えるために起業します。その組織は創業者を含め即戦力になる人間で構成されており、しつかりとしたビジネスモデルもないなかを模索しながら新しいビジネスモデルを開発し、急激な成長を目指します。アメリカの場合は、GoogleやFacebookに代表されるような大きなリターンを達成したスタートアップが多く存在し、ひとつのカルチャーにもなっているため、一攫千金を狙った投資及びビジネス展開の事例が数多くあります。しかし、日本では、投資回収の規模が小さいため、スタートアップの成功事例は散見される程度です。

Femtechの盛り上がりの時代背景

Femtechは女性の総合的な健康問題、つまり世界の全人口の約半分の健康問題に取り組む広範囲を扱うテクノロジーです。したがってFemtechは、これまでタブー視されてきた女性の「性」の課題に真っ向から取り組み、課題を解決してくれる存在であり、現代を生きる女性にとっての武器であり戦術と捉えることができます。自分自身の月経の話やセックスの話は多くの女性が悩みを抱えているにも関わらず、容易に他の人に打ち明けたり、相談することは出来ません。なんとなく他人とは共有しづらかった女性特有の性に関する悩みや問題が、近年は少しずつ可視化される社会が形成されつつありますが、まだまだ受け入れられる土壌が完全に出来上がっているとは言えません。そうした女性特有の性に関する悩みや問題を「個人的な問題だから仕方ない」で片付けるのではなく、前向きに取り組む解決しようとするビジネスは、悩みを抱える女性にとって救いの手段になるかもしれません。

また、女性起業家が増え、「女性による女性のためのビジネス」の隆興や、多くの女性が声をあげた#Me too運動(*注2)も後押しになっています。経済・政治分野では依然としてジェンダーの不平等が存在しているものの、より女性の意図や女性特有の悩みが汲み取られやすい真に平等な社会へと変革している時と言えます。

(*注2)#MeToo

#MeToo(ミートゥー)は、「私も」を意味する英語にハッシュタグ(#)を付したSNS用語です。セクシャルハラスメントや性的暴行の被害体験を告白・共有する際にソーシャル・ネットワーク・サービスで使われています。「Me Too」、「#metoo」なども運動して使われます。欧米では、被害を告発する「私も」運動と、被害の撲滅を訴える「タイムズ・アップ(Time's Up)」運動が存在しますが、日本においては混同され「#MeToo」のみが用いられています。



近年のテクノロジーによる変革がこの動きを支えている

テクノロジーの進化もFemtech分野の追い風です。女性の健康問題に限らず、Fintech(金融×テクノロジー)やAgritech(農業×テクノロジー)などの分野では、さまざまな社会課題を解決するテクノロジーが、より正確な情報収集と解析によって、より効率的で根本的な解決策を導き出します。

これらの分野で成功・認知されたテクノロジーが、女性の誰もが気にする「女性特有の健康問題」において、その悩みをデータ化し、より適切な解決法を提案する「Femtech」として認知・注目されることは自然なことかもしれません。個人情報を含めたセキュリティへの配慮は必須ですが、企業が医療機関と連携することで、より多くのデータが蓄積され、さらに専用アプリで医師とつながり身体の悩みを相談できるようなサービスが構築されることもあるかもしれません。

Femtechの事例 -多くの種類が存在しています-

<海外企業の事例>

Cora(コーラ)

月経周期、月経量に合わせてカスタマイズし、毎月生理用品を送ってくれるCoraもFemtechの1つです。材料もオーガニックコットンを使用し、綿花農家とのフェアトレードにもこだわっています。また、「女性らしさ」を強調するピンクのパッケージではなく、白と黒でデザインされているところも特徴です。

Clue(クルー)

Clueは次の月経開始はいつなのか、PMS(月経前症候群)の予測に役立つトラッキングができるアプリです。月経開始日と持続日数を記録しておくだけで、月経周期の分析と予測をしてくれます。いま1000万人ものユーザーが集まる注目のアプリです。

Elvie(エルヴィー)

妊娠、出産を機に筋力が衰えやすいという骨盤底筋ですが、この絞める力が衰えると尿漏れや頻尿の原因にもなります。この骨盤底筋を鍛えるテクノロジーとして、Elvieが誕生しました。小さなキットを腔内に挿入しておく、アプリと連動して骨盤底筋を絞めるトレーニングができます。

Dadi(ダディ)

不妊症の治療は女性だけではなくありません。WHOの調査によると、不妊の原因は41%が「女性のみの」、24%が「男性のみの」、24%が「男女とも」という結果で、精子も加齢とともに精子量が減り、妊娠しづらくなります。Dadiでは採取した精子を郵送すると、精子量や濃度が検査されたレポートを受け取ることができ、また精子を保管することができます。理論上は200年にわたって新鮮な精子と同じくらいの精度を保って管理できるとのことです。

<日本企業の事例>

fermata(フェルマータ)

「あなたのタブーがワクワクに変わる日まで」をビジョンとするFermataは、オーガニック生理用ショーツや、月経カップなどをオンラインストアで販売するフェムケア・フェムテックのブランドです。



2020年4月現在の日本国内のFemtechマーケットマップ

Femtechの拡大に期待が

近年少しずつですが、仕事と育児が両立しやすいように求める女性の主張や、女性の生理を「隠さないといけなものではない」と呼び掛ける声が強くなってきました。このような主張をするべきだという考えもある一方で、月経を隠したい、男性と同じように仕事がしたいわけでもない、といった考えもあるのがジェンダーの不平等問題を語るうえで難しい点です。しかし、現代を生きる女性が少しでも生きやすい世の中になることは全ての女性にとっての願いであることには違いありません。Femtechが進み、テクノロジーの力で少しでもそのような社会が形成されていくことはよい動きなのではないでしょうか。